



### 42 虫に姿をかえた王女さま (リトアニアの昔ばなし)

「旅に出て一年後に最も美しい布を持ち帰った者に農場をやる」と父は3人息子に告げました。2人の利口な兄のどちらかだと思っていたからです。

おろか者だった末の弟は森に迷い込んで、とぐろを巻いた大きな虫に出会いました。虫は「私の世話をして一年間懸命に働いたら美しい布をやる」と言いました。

一年後、おろかだと思っていた末の弟がりっぱな布を手に戻ったので父は再び言いました。「次は美しい指輪を持ち帰るように」。弟はまた虫のために働き、りっぱな指輪を手に戻りました。どうしても農場を渡したくない父は3度目に、美しい娘を連れて帰るように言いました。また一年間働かせた後で、虫は弟に命じます。「自分を火の中に入れて部屋から出ろ。決して振り返るなよ」。

弟は心を苦しめながら火の中に虫を投げ入れ、その苦しみに気を失ってしまいます。しかし気をとり戻した弟のそばには、なんと魔法がとけて虫から元に戻った王女さまと王国がありました。弟はもう農場などいりませんでした。大きな王国を手に入れ、美しい王女とは真心で結ばれたのですから。

みにくい姿にとらわれず、二人の心は結ばれました。

### 世界昔ばなしを科学する

このシリーズは、半導体技術で世界に貢献するロームがお届けしています。おなじみの世界の昔ばなしの中から毎回テーマの一つとりあげ、そこに隠れているいろいろな不思議を科学の視点で見つめます。さて、今回のおはなしは…

#### おしらせ

バックナンバーは、ロームの文化支援のサイトでご覧いただけます。  
[www.rohm.co.jp](http://www.rohm.co.jp)へアクセス

#### ●昔ばなし「ありのままの真実」

「虫に姿をかえた王女さま」。日本ではあまりなじみのない昔ばなしです。しかしヨーロッパでは北欧のリトアニアだけでなく、西はスペイン、南はイタリア、東はトルコまでほぼ全土に伝わっています。グリムの昔ばなしにも「3まいのはね」という題名でおさめられています。昔ばなしは世界中で、口で語られ耳で聞かされてきた文芸で、音楽のような性質・技法を持っています。その内容には、自然と人間が共存して暮らしていたころの世の中のありのままの姿が表現されていたのです。人間も他の生き物を食わなければ生きていけない自然の業、生き抜くために懸命に知恵を出し成長する若者の姿などが、教訓話や甘いファンタジーに書き換えられていない本物の昔ばなしにはそのままに残っています。

#### ●昔ばなしは、3回繰り返す。

このお話でも、父親は、3人の息子に物を持ち帰るように命じます。白雪姫も毒りんごだけでなく、それまでに2回、紐と櫛で女王の毒牙にかかってしまいます。シンデレラの元になる「灰かぶり」のお話は、実は中国南方が起源でヨーロッパや日本に伝わってきたお話です。原文の形に近いグリム童話の中でも、シンデレラは宮殿の舞踏会に3回繰り返して行っています。リズムの良い3回の繰り返しは、中国でも、ヨーロッパでも同じということがわかります。しかし、なぜか意味もなく2度も王子さまから逃げ帰ってしまいます。1度目に

求婚されたときにすんなり結婚してしまえばよいのではないかと思います。実は、この繰り返しは昔ばなしの語りの文芸としてのリズムのよさに加えて、思春期の子供の行動そのものである心の揺れを語っているのではないかとわれています。

#### ●昔ばなしは、人生の真実を語ります。

昔ばなしは、子どもや若者を主人公にする場合、その主人公がさまざまに変化しながら成長していく過程を語るものが多くあります。その内容は、人間の成長のいろいろな場面における残酷な面も含め、けんかもするし、だましたりもするし、という現実の姿を語っています。「三匹のこぶた」では、狼とこぶたが食うか食われるかの戦いをする。生き物の自然な姿を描いた物語なのです。しかし、残酷な内容と思われることも実体を抜いてさっぱりと語ります。昔、子どもというのは、ほっぽりだされていて、けんかしたり、助け合ったり、悪知恵を出し合ったりして、たくましく育っていました。昔ばなしは「人間は自然の中で一生懸命、自分の文化の場所をつくって生きてきたんだよ」と語るのです。昔ばなしを語るとき、大人と子どもは必ず近くにあります。それによって一体感、信頼感が生まれてきます。それが実は、昔ばなしの語りのもっとも大切な意義なのです。

昔ばなし監修・取材協力／昔ばなし研究所所長 小澤俊夫